

## 母親の育児不安の研究動向

— 概説と展望 —

北村（難波）亜希子\*・小田 慈

新見公立大学看護学部

(2016年11月30日受理)

文献検索サイトの医学中央雑誌Web ver 4, CiNii with Full Text で1983年～2016年5月まで「母親の育児不安」に関する国内外の文献の中、妊娠中からの母親調査、産婦、一般乳幼児・学童等の母親、ハイリスク児の母親、妊産婦に関する文献を抽出し、母親の育児不安の動向を考察した。

医学中央雑誌Web ver 4に掲載された「母親の育児不安」のキーワードで原著論文349件、CiNii with Full Textは「anxiety of mothers」のキーワードで355件がヒットした。

母親の育児不安は、長期入院治療を要する患児に関する論文から低出生体重児や出生後の健診時期、育児不安の尺度開発、サポートシステムの開発での様々な立場から追究されていた。近年は、「母親の育児不安」と同様に虐待された児の母親を対象とした育児不安の論文と低出生体重児の論文もあり、その動向は低出生体重児などのハイリスクが増加している社会情勢に即していた。

(キーワード) 母親, 育児不安, 虐待, 原著論文

### 1. 緒言

1965年に創刊された日本総合愛育所紀要に1974年「育児不安」をテーマにした実践報告<sup>1)</sup>が初めて掲載されてから「育児不安」の要因についてもこれまでにいくつかの研究がおこなわれている。戦後の混乱期を経た1974年は経済発展に伴う都市化、核家族化の中で従来、家事・育児は女性の役割とされてきた母親の育児環境について社会の関心が向けられた<sup>2)</sup>。さらに近年、女性の高学歴化と社会進出によって、仕事を持ちながら子育てをしている母親の増加さらには、地域の希薄な人間関係から育児の協力者や相談相手も少なく子どもが育つ環境そのものの脆弱性など母子を取り巻く環境は変化している。

2002年に策定された「健やか親子21」の4つある主要課題の1つに「育児不安の軽減」があげられた。この課題に対して2010年の中間評価では4人に1人の母親が「子育てに自信がもてない」状況にあり<sup>3)</sup>、最終評価からの次期計画に向けて、子どもの成長を支える地域の支援体制づくりと育てにくさを感じる親に寄り添う支援が課題にあがっていた<sup>4)</sup>ので、子育て支援は少子化対策の中でも多く行われているが育児不安は減少していない状況にあるといえる。さらに、現代の母親は出産前に乳幼児と触れ合う機会が少なく、育児能力を獲得しないまま出産後、育児を初めて行う母親が多く<sup>5)</sup>母親の育児不安を助長することになる。そして、3歳未満の子どもをもつ母親の約8割は専業主婦として

育児を行う<sup>6)</sup>ことから家の中で子どもと2人になる密室での育児状況の母親が多く存在し、母親の育児不安を助長していると考えられる。

以上のような日本の現状課題から育児不安に関する先行文献は、1980年前後から母子保健や精神保健、保育分野でマタニティブルーズ、育児不安、育児ストレス、育児困難感等様々なキーワードで報告されていた。本稿では、母親の育児不安の研究動向を把握する目的で、1983年以降2016年5月までの間、国内外の文献のうち母親の育児不安に関する文献を抽出して育児不安の研究状況を分析した。

### II 研究方法

#### 1. 研究デザイン

文献検索研究

#### 2. 対象文献の選定

文献検索サイトの医学中央雑誌Web ver 4, CiNii with Full Text, で以下の検索を実施した。①医学中央雑誌Web ver 4に掲載された1983～2016年5月のデータから「母親の育児不安」のキーワードで原著論文を検索した。②Public Medical with Full Textの1983～2016年5月に掲載されたデータから「anxiety of mothers」のキーワードで検索した。③CiNii with Full Textの1983～2016年5月に掲載されたデータから「anxiety of mothers」のキーワードで検索した。

\*連絡先：北村（難波）亜希子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

### 3. 分析方法

医学中央雑誌Web ver 4 (1983~2016年5月), CiNii with Full Text (1983~2016年5月)で検索された文献数から「母親の育児不安」「anxiety of mothers」に関する原著論文文献件数を概観した。

次に医学中央雑誌Web ver 4で検索された原著論文349件, CiNii with Full Text「anxiety of mothers」で検索された355件について, 文献の表題から研究の動向を概観した。さらに検索された原著論文から, 妊娠中からの母親調査, 産後うつ, 生後時期による縦断研究, サポートシステム開発, 測定尺度開発, 低出生体重児等子どもの体重比較に関する文献を抽出して, 国内外の文献のうち母親の育児不安に関する文献を抽出し母親の育児不安の研究動向を把握し, 分析した。

## III 結果

### 1. 国内における「母親の育児不安」に関する原著論文の概況

国内の学術研究の動向は医学中央雑誌Web ver 4における「母親の育児不安」のキーワードでヒットした349件の原

著論文についてその表題を分析した。

分析対象文献の母親の属性を分類した結果(図1), 最も多いのは一般乳幼児・学童の母親を対象とした190件(54.4%), 次にハイリスク児の母親を対象とした91件(26.0%) 妊産婦を対象とした68件(19.4%)であった。また, 一般の母親の中では, 乳幼児の母親を対象とした原著論文が最も多く, 文献総数349件中104件と総件数の約30%を占めていた。ハイリスク児の母親は, 低出生体重児の母親を対象とした原著論文が91件中最も多く, 文献総数349件中41件と総件数の約10%以上を占めていた。その他にハイリスク児の母親の中では, 病児が24件(6.9%), 虐待児15件(4.3%)と多胎児6件(1.7%)と障害児が5件(1.4%)の論文がみられた。妊産婦を対象とした論文では, 産婦49件(14.0%), 妊婦19件(5.4%)であった。

年次的傾向では, 1985年以降, 2003年が最も多い(図2)。一般の母親の中では, 2003年乳幼児の母親を対象とした原著論文が19件と最多で, ここ10年間では減少していた。2003年と2004年ハイリスク児の母親を対象とした原著論文も9件と多かったが, ここ10年間は微少傾向にあった。

妊産婦を対象とした論文では, 2012年が8件と最多で, 同様にここ3年間は微少傾向にあった。産婦の育児不安を産

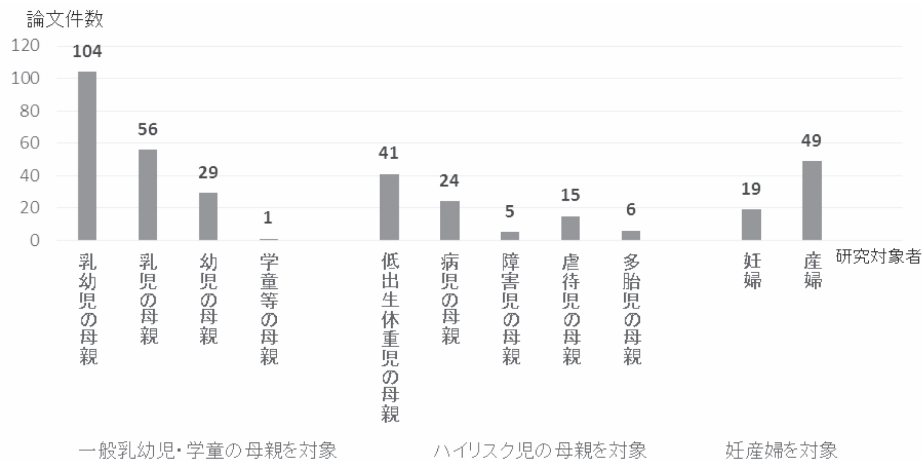


図1 医学中央雑誌のキーワード「母親の育児不安」の原著論文件数 (1983~2016年5月)

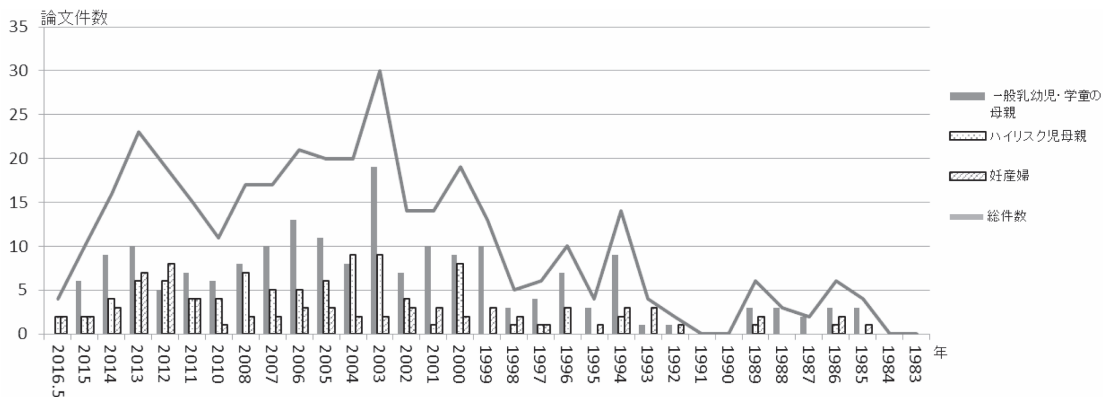


図2 「母親の育児不安」の原著論文件数の年次推移

後入院中から産後1カ月、産後18カ月と縦断的に調査した原著論文<sup>27)</sup>の結果、身体的な疲労は入院中が最も産後の疲れを感じ、疲労と混乱は産後1カ月、18カ月と上昇するとされていた。

### 3. 海外論文の傾向

CiNii with Full Textの検索では、キーワード「anxiety of mothers」で355件の原著論文がヒットした。年次的にみると2001年以降の論文が195件(75%)あり、2006年が32件(12.3%)と最多で、その後2007年以降は減少していた。論文の対象は、ハイリスク児の母親を対象とした原著論文が160件(45.1%)と最多で、その内訳は病児62件(17.5%)障害児61件(17.1%)と大多数を占めていた。一方、妊産婦を対象にした論文は85件(23.9%)であった。一般乳幼児・学童の母親を対象にした論文は、110件(31.0%)でその内訳は、乳幼児の母親58件(16.3%)、乳児の母親29件(8.2%)、幼児の母親21件(6.0%)、学童の母親2件(0.6%)であった。2006年以降、一般乳幼児・学童の母親を対象にした論文は1~9件であり、ハイリスク児の母親を対象にした論文は2006年以降19件から1~9件に減少した。

### 4. 「母親の育児不安」原著論文に関する国内と海外の動向

母親の育児不安に関する研究は、1970年代からみられ、1999年頃から増加し、①産婦から産後1カ月に関する研究、②生後1~2カ月に関する研究、③生後3カ月、④18カ月児など産後の時期での縦断的調査論文や海外論文は、⑤ハイリスクな母親に関する論文が多く発表されていた。国内文献と比較して、ハイリスク児の母親を対象にした論文160編(45.1%)が一般乳幼児・学童の母親を対象にした論文110編(31.0%)より多い傾向にあった(図3)。

産婦から産後1カ月に関する文献<sup>7)</sup>では、初産婦は経産婦より「親としての自信」、「自己肯定感」は低く、「生活

適応」、「夫に対するサポートの認識」は差がなかった。育児技術の支援を早期に行うこと、夜間の育児技術の及び情緒的サポートが得られるような環境整備が必要だと報告されていた<sup>5)</sup>。

また、育児不安は「怒り・敵意」と相関がみられ、内容は育児の結果、自分自身への影響(夜眠れない、自由な時間がない)があり<sup>8)</sup>、出産で入院中や産後1カ月の母親に対する心理的支援は、親になった後の他者から受ける肯定的経験による再構築を助けるうえで有用であり、母親が気持ちよく育児することが結局は子どもとのやりとりにおいて肯定的な結果となると報告していた<sup>9)</sup>。

生後1~2カ月の乳児をもつ母親に関する文献<sup>10)</sup>では、出産後2カ月までの初産婦は経産婦に比べ乳児の泣き声が何を要求しているかわからず、オロオロした危機状態にあり、必要な育児情報へのアクセスができず、先の見えない不安、情報から迷いが生じた母親は「母親として自信の揺らぎ」、さらに必要な情報を選択できない母親は「泣き止まないことへの苛立ち」があることが明らかにされていた<sup>11)</sup>。

生後3カ月の調査では、産後の抑うつが産後3カ月前後でピークになること<sup>12) 13)</sup>、自分のための時間がないこと、子どもの世話のために家事を思うように行うことができないことへの負担感<sup>14)</sup>も指摘されていた。

産婦の縦断的な育児不安調査<sup>15)</sup>では、母親の疲労や混乱は産後入院中より産後1カ月、産後18カ月と上昇したと報告されていた。また、18カ月児の母親は、「育児・家事・仕事の両立」「育児ストレス」が多く、外来受診をした児の母親の6割以上に育児不安があると回答し、その内容には子どもの病気や育児に関することがあげられていた<sup>16)</sup>。また、1歳6カ月児の母親を対象にした調査<sup>17) 18)</sup>では、母親の育児不安には、夫の育児行動と情緒支援が関係して

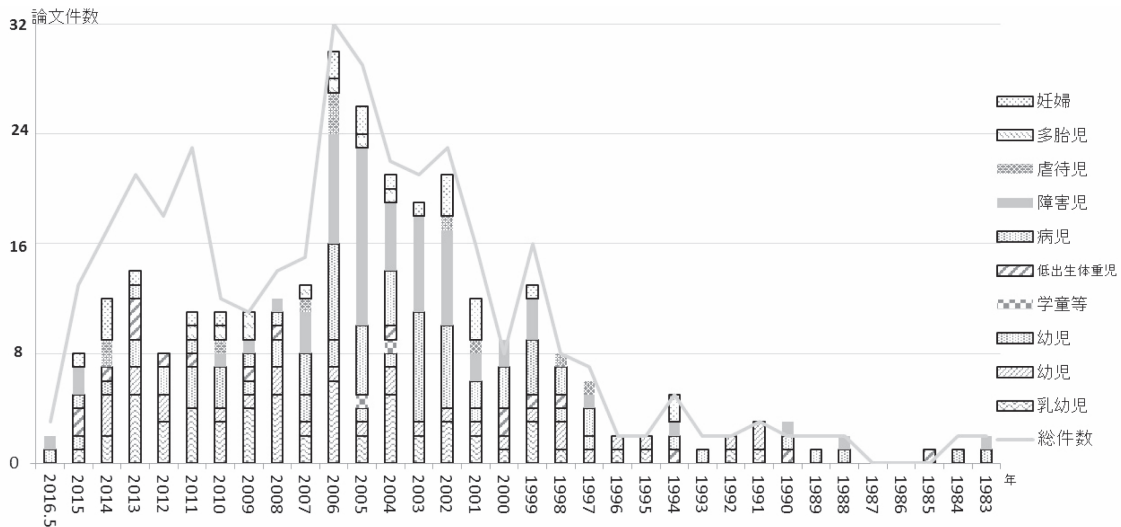


図3 「anxiety of mothers」の原著論文件数の年次推移

り、夫からの支援が得られていないと感じる母親は、社会的視野が狭くなり、一人で育児をしているという不安感をもっていると報告していた。

ハイリスクの児を対象とした「母親の育児不安」に関する原著論文の中で、低出生体重児をもつ母親は出生した直後、NICUで子どもが気管内挿管や輸液をされている姿をみて動揺し、ときには強く葛藤する感情をもっていた<sup>19)</sup>。また、母親が退院した後に、NICUでの子どもとの面会では、子どもの状態の不安定さや体重増加不良などに、自責の念を感じていた<sup>20)</sup>。子どもの出生体重が小さいほど、あるいは、入院期間が長いほど母親の育児不安が強いことが指摘されていた<sup>21)~24)</sup>。NICUを退院した児の母親は、子どもの体重が小さい、病気になりやすい、言葉が遅い、動作が遅いなどの発育・発達に関する事、育児や栄養、将来への心配事を抱えており<sup>25)</sup>、「同じ悩みをもつ親の会の設置」「NICUを退院した児の親の会の設置・参加」等を望んでいることが報告されていた<sup>26)</sup>。

#### IV. 考察

##### 1. 国内における「母親の育児不安」に関する原著論文の概況と動向

産婦の疲労や混乱について、産後入院中から産後1カ月、産後18カ月と縦断的に調査した原著論文<sup>27)</sup>から、身体的な疲労は入院中が最も産後の疲れを感じ、疲労と混乱は産後1カ月、18カ月と上昇し、この疲労と混乱は、単なる身体的な疲労だけではなく、精神的な疲労も考えられた。初産婦の母親が分娩後、子どもという生活としてベースをつかめてくるのは、平均2.8カ月であるといわれる<sup>28)</sup>ため、子どもの注視、発声、微笑といった行動により、児とのコミュニケーションが可能となる時期は産後3~4カ月頃であり、この時期は無料の乳幼児健康診査が行われている。産後3~4カ月頃は子どもとの関係を考えると母親が子どもの性格を解っていく時期であり、多くの文献がみられた<sup>13) 15) 29)~31)</sup>。

母子保健法の第1条で、実施が義務付けられている1歳6カ月健診は、幼児期初期の身体の発育、心の発達が、歩行や言語の発達など次第に二語が出始めてくる時期に行われる健診であり、多くの報告がみられた<sup>17) 27) 32)~34)</sup>。

##### 2. 海外における「母親の育児不安」に関する原著論文の概況と海外での動向

国内の原著論文と比較して、ハイリスク児の母親を対象にしたoriginal academic article160編(45.1%)が一般乳幼児・学童の母親を対象にした論文110編(31.0%)より多い傾向にあった(図3)。論文の内容別にみると、母親の育児不安は、母親の精神状態、子どもの健康状態、発達状態と関連していた。ハイリスク児の母親を対象にした論文の中で出生時体重に関する文献<sup>35)</sup>は、社会経済因子との関連性から出生時体重<sup>36)</sup>に影響する要因は、43の要因があげられ、

主として子どもの性、人種、母親の身長、母親の妊娠前の体重、父親の身長と体重、出生順位、低体重児分娩歴、喫煙、低栄養およびに妊娠中の体重増加不良、母親の罹患状況、マラリア既往歴、アルコール消費などと報告されていた<sup>36)</sup>。

産後はうつ病などの精神疾患がなくても母子関係に障害をきたしやすいこと<sup>37)</sup>、病児や障害児が生育環境の中で虐待に移行する文献が多くみられた<sup>37)~41)</sup>。

##### 3. 「母親の育児不安」に関する原著論文の国内と海外の動向

虐待に関する国内の文献が4.9%であるのに対して、海外は3.1%であった。母親の育児不安に関する論文の動向と社会情勢の関連をみてみると、国連による「子どもの権利条約」が採択された1988年、日本国内においても「児童福祉」から「児童家庭福祉」という概念が一般化され、育児や育児を取り巻く母児の環境を背景とする母親の育児不安に関する論文が増えてきた。1990年、大阪に「児童虐待防止協会」が設置されたことを契機に、民間ボランティアによる虐待防止活動が全国に広まった。2000年には、「児童虐待の防止に関する法律」の制定など、児童虐待は現在も大きな社会問題とされている。虐待児の動向においては、親の育児態度や育児に対する意識調査が増加し、リスクの高い母親のスクリーニングなど虐待予防を目的とした研究も行われている。虐待は世代間伝達の問題として重要な要因になり、目の前にいる子どもに怒っているのではなく、以前の加害者を子どもに置き換え、または虐待されていた嫌な自分を子どもに投影し、自分を叩くように子どもを叩いている子どもへの感情や養育態度は母親の被養育体験の影響を受ける<sup>42)</sup>といわれている。また、母親の子どもに対する愛着は虐待的行為に負の影響を及ぼし、親になった後の他者から受ける肯定的経験により再構築されると報告<sup>43)</sup>されている。母親の育児不安の心性を第1心性は、育児への「自信のなさ・心配・困惑・母親としての不適格感」、第2心性は子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」であり、この2つは相関関係があり、育児不安そのものが虐待へのハイリスク要因であり、育児不安をもつ母親への援助は虐待防止に繋がると考えてよい<sup>44)</sup>と報告があり、医療者は乳幼児健診で母親の育児不安や訴えを聴き、母親が相談する内容を子育て時期に探り、夫や家族も含めた支援体制を整備する必要がある。

#### V 結語

「母親の育児不安」「anxiety of mothers」をテーマとした国内と海外論文の動向と内容を概観し、以下のことが明らかになった。国内では母親の育児不安に関する原著論文は1985年からみられ、海外では1983年からみられた。また、育児不安に関する論文数は増加し、その動向はハイリスク

妊娠や低出生体重児の増加など社会情勢に即していた。研究内容別にみると、一般乳幼児・学童の母親に関する研究、ハイリスク児の母親を対象にした研究、妊産婦を対象にした研究に分類された。

母親の育児不安に関する今後の課題としては、育児への「自信のなさ・心配・困惑・母親としての不適格感」、子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」は夫婦関係、子どもの状態、母親の性格と他のリスク要因を含めてどのような付加的因子が育児不安をもたらすのか、また、母親が相談する内容を子育て時期によって探る方法の検討が必要になる。

## 文献

- 1) 高橋種昭, 松島富之助, 羽室俊子, 他: 母性の精神衛生に関する研究. 日本総合愛育研究所紀要, 10, 1974.
- 2) 川井尚, 庄司順一: 「育児不安」これまでとこれから. 子ども家庭福祉情報, 10, 39-42, 1995.
- 3) 厚生労働省. 「健やか親子21」第2回中間評価報告書. 雇用均等・児童家庭局. 2010. <www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/s0331\_13a.html> (アクセス: 2016年9月3日)
- 4) わが国の母子保健. 平成22年 財団法人母子衛生研究会. 1, 14-17, 2010.
- 5) 大田康江, 高橋眞理: 産褥早期における母親の児への愛着形成を促進する看護者の関わり. 56 (4), 618-625, 2016.
- 6) 厚生労働省: 平成24年版厚生労働白書. 東京, 日経印刷株式会社, 3083-25, 2012.
- 7) 田中和子: 産後1か月の母親に関する育児適応に影響を与える要因の検討. 日本助産学会誌, 21 (2), 71-76, 2007.
- 8) 田中和子: 産後1か月の母親に関する育児適応に影響を与える要因の検討. 日本助産学会誌, 21 (2), 71-76, 2007.
- 9) 武田江里子, 田村一代: 妊産褥婦の気分と対児感情との関連および「怒り・敵意」に関する研究. 日本看護研究学会雑誌, 31 (1), 37-45, 2008.
- 10) 数井みゆき, 無藤隆, 園田菜摘: 子どもの発達と母子関係・夫婦関係-幼児を持つ家族について-. 発達心理学研究, 7 (1), 31-40, 1996.
- 11) 飯田美代子, 宮里和子: 「わたしの育児日記」利用者の育児に関する心配ごとと育児日記との関連. 母性衛生, 44 (2), 250-259, 2003.
- 12) 岡本美和子, 松岡恵: 産後1~2か月における児の持続する泣きに直面した初産婦の危機状態. 日本女性心身医学会誌, 8 (1), 85-92, 2003.
- 13) 武田文, 宮地文子, 山口鶴子他: 産後の抑うつとソーシ
- ャルサポート. 日本公衆衛生雑誌, 45, 564-571, 1998.
- 14) Kumer R, Robson KM: A prospective study of emotional disorder in childbearing women. British Journal of Psychiatry 144, 35-47, 1984.
- 15) 池田浩子: 育児負担感に関する研究-育児負担感の時期別変化と母親の心理状態との関連-. 母性衛生, 42, 2001.
- 16) 伊吹麻里, 中村歩美, 中野真希, 他: 核家族における乳幼児期の母親の育児不安-育児不安に影響する人的環境要因-. 藍野学院紀要 (18), 105-111, 2004.
- 17) 中山美由紀, 三枝愛: 1歳6か月児を持つ母親に対する父親の育児支援行動. 母性衛生, 44 (4), 512-520, 2003.
- 18) 大沼珠美, 桑名佳代子, 桑名行雄, 他: 乳幼児をもつ母親及び父親が体験する育児困難と育児支援サービスへの要望. 宮城大学看護学部紀要, 6 (1), 83-96, 2003.
- 19) Casteel GK: Departments of Obstetrical and Pediatric Nursing at the University of Pittsburgh. Maternal-child nursing journal, 19(3), 211-220, 1990.
- 20) Casteel GK.: Departments of Obstetrical and Pediatric Nursing at the University of Pittsburgh. Maternal-child nursing journal. 19(3), 211-220, 1990.
- 21) 宮崎つた子, 我部山キヨ子: NICU入院を経験した患児をもつ両親への意識調査(第2報)-親の心理的特性-. 母性衛生, 44 (1), 127-133, 2003.
- 22) Gennaro, S, York R, Brooten D: Anxiety and depression in mothers of low birthweight and very low birthweight infants Birth through 5 months. Pediatric Nursing, 13, 97-109, 1990.
- 23) Kateleen F, Marion O, Pat R: Early transitions for the parents of premature infants Implications for intervention. Infant Mental Health Journal, 13(2), 147-156, 1992.
- 24) 神田千恵, 本間真紀, 白石道子, 他: NICU入院による分離を体験した母親の産後うつに関する検討. 母性衛生, 48 (2), 331-336, 2007.
- 25) 酒巻恵美子, 上場玲子, 戸田真美子, 他: すくすく外来超低出生体重児の育児支援外来の必要性. 埼玉小児医療センター医学誌, 13 (1), 50-54, 1996.
- 26) 上野淳子, 窪田いくよ, 大塚富美子, 他: NICUを退院した児の母親の育児に関する心配ごととニーズ等について. 周産期医学, 30 (10), 1367-1371, 2000.
- 27) 武田江里子: 18か月児を持つ母親の「怒り・敵意」に関する要因および胎児感情への影響-妊娠末期から産後18か月までの日本版POMSによる追跡調査から-. 日本助産学会誌, 23 (2), 196-207, 2009.
- 28) 片桐麻州美: 効果的な産褥家庭訪問の確立に向けて-母親99人の調査から-. 助産師雑誌, 50 (10), 42-45, 1996.
- 29) 浜崎優子, 平田和子, 寺本恵光, 松田光枝: 3~4か月

- 児をもつ母親の乳児検診における主訴の分析. 保健師ジャーナル, 66(1), 44-52, 2010
- 30) 平松真由美: 乳児の睡眠リズムと育児ストレスについて, 小児保健研究, 65(3), 415-423, 2006
- 31) 高橋泉: 乳幼児の睡眠覚醒リズムと食事および母親の睡眠-生後3ヶ月から17ヶ月までの縦断調査-, 小児保健研究, 65(4), 547-555, 2009
- 32) 久保由美子, 長尾秀夫, 宮内清子: 母性意識質問紙による育児環境ハイリスクマザーの早期発見に関する研究, 愛媛大学教育学部紀要, 49(2), 79-86, 2003.
- 33) 牧田郁夫: 1歳6か月検診時アンケート調査結果—特に母と子の生活や心理に関して—, 日本小児科医学会会報, 30, 167-173, 2005.
- 34) 桑名佳代子, 細川徹: 1歳6ヶ月児を持つ親の育児ストレス(1)—母親の育児ストレスと関連要因—, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 56(19), 247-263, 2007.
- 35) Kramer, M.S: Determinants of low birth weight, methodological assessment and meta-analysis. Bull WHO, 65, 663-737, 1987.
- 36) Sterky, G & Mellander L: SAREC/WHO Workshop. Birth-weight distribution-an indicator of social development in SAREC Report NoR2. WHO, Genova, 5-6, 1998.
- 37) Kumar, R Channi: "Anyboy's child" severe disorders of mothers-to-infant bonding. British Journal of Psychiatry, (171), 175-181, 1997.
- 38) Waters E, Deane KE: Defining and assessing individual differences in attachment relationship, Monographs of the Society for research in Child Development, 1985.
- 39) Koniak-Griffin D: Maternal role attachment, Journal of Nursing scholarship, 25(3), 257-262, 1993.
- 40) Leahy-Warren P, McCarty G, Corcoran P: First-time mother's social support of maternal parental self-efficacy and postnatal depression, Journal of Clinical Nursing, 21, 388-397, 2011.
- 41) Xie R-H, Yang J, Liao S: Prenatal family support, postnatal family support and postpartum depression, The Australian & New Zealand Journal of Obstetrics & Gynaecology, 50(4), 340-345, 2010.
- 42) 広岡智子: グループが提供する育児不安や虐待問題を抱える母親への心理的援助. 精神科臨床サービス, (3), 337-339, 2003.
- 43) Brockington, I. F: A screening Questionnaire for mother-infant bonding disorder. Archives of Women's Mental Health(3), 133-140, 2001.
- 44) 川井尚: 育児不安, 虐待意識・現代子育て事情・平成12年度幼児健康度調査から見えるもの-. 日本子ども資料年鑑, KTC中央出版, 12-19, 2002.

### **Research Trends on Mothers with Child Rearing Anxieties -Overview and Prospects-**

KITAMURA(NANBA) Akiko, ODA Megumi

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

#### Summary

This study examines trends in mothers with child rearing anxieties by extracting studies pertaining to surveys on mothers during pregnancy, nursing mothers, mothers of infants and school-age children in general, mothers of high-risk children, and expectant and nursing mothers from among studies in Japan and abroad pertaining to "mothers with child rearing anxieties" from 1983 until May 2016 in the following bibliographic search sites: Japana Centra Revuo Medicina Web ver. 4, CiNii with Full Text Using the keywords "hahaoya no ikuji fuan" (mothers with childrearing anxieties) resulted in 349 original academic articles on Japan a Centra Revuo Medicina Web ver. 4, and the keywords "anxiety of mothers" resulted in 355 hits on CiNii with Full Text respectively.

For mothers with child rearing anxieties, there were various articles and research pursued from various standpoints: chronically ill children requiring long-term hospitalization, children with low birth weight and the period of their medical examinations, the development of metrics for child rearing anxiety, and the development of a support system. The number of articles increases as the years go by and their trends are in line with social circumstances.

Keywords: mother, child rearing ,anxiety, abuse, original academic article